

## 8 分科会

# 主体的・対話的で深い学びの実現

～アクティブラーニングの視点から

具体的な指導の手立てと評価・振り返りを考えてみよう～

ディレクター名	青木 知子（白百合幼稚園）
司会者名	青木 知子（白百合幼稚園）
運営委員名	田中 邦昌（認定こども園みのる幼稚園）
話題提供園名	本村 佳代子、早川 実穂 （認定こども園聖十字幼稚園） 梶川 恵、西村 春香 （認定こども園こまくさ幼稚園）
助言者名	川久保 あけみ（元長野県公立小学校 校長）
分科会担当責任者名	堀 幸枝
会場	富山国際会議場 2階 201・202
参加人数	111人

### 呼びかけ

「主体的・対話的で深い学びの保育」の実現では、保育者はその状況に合わせた多様なかかわりが求められる。

2歳児からの発達を踏まえて、保育者は子どもの気持ちに寄り添い、見守りながら関わっていく中で、一人ひとりの子どもの育ちや、それぞれの子が思いやイメージを共有して遊び込んでいる姿をどのように評価、振り返りをしたらよいのか考えていく。

また、これらの遊びが次の「深い学び」へと発展する環境を子どもと共に作り上げていく方法を考えていきたいと思う。

### 研究の手がかり

- 子どもの発達に即した「主体的・対話的で深い学び」とはどのようなものであるか、具体的な事例を通して考えてみる。
- それらの学びが実現するための環境構成や援助について考える。
- 次の活動につながるための評価と振り返りの方法を考える。

## 話題提供 1 認定こども園聖十字幼稚園

<研究・実践にあたって>

○乳児の心と体の成長に伴う遊びの発展を追う中で、「主体的、対話的で深い学び」の姿を見出す。

○幼保連携型認定こども園の特長を生かし、乳児期の姿を幼児期へと繋いでいくために保育者同士の連携を深めていく。

<乳幼児の姿と発達の特徴～本園の保育者の視点から～>

0歳児…保育者に見守られているという安心感が欠かせない。保育者は乳児に優しく丁寧に関わり、スキンシップや触れ合い遊びを通して信頼関係を築くよう努めている。

1歳児…身の回りで見つけたものを手に取ってはその物と様々に関わりながら遊ぶ。「これは？」「なに？」「うーん？」などと探求心が出てくる対象で「面白い！」の実感から、更に遊びが続き、広がる。

2歳児…様々な物を何かに見立て、ごっこ遊びが増える。自我が芽生える時でもあり、自分の思いを行動ではなく言葉で訴える事、友達とのやり取りを通して、自分の思いと相手の思いを保育者の仲立ちにより知っていく。

<事例1>「牛乳パックを使って 何して遊ぶの？」(Kちゃんの事例)

牛乳パックを使って遊び始める。→家族で温泉旅行へ行ったことから牛乳パックをお風呂に見立てて遊ぶが、壊される。→新しい遊びの素材「スポンジ」を出す。

○事例を追う中で、素材が豊富にある環境が子どもの遊びを繋げていくこと、1歳・2歳の成長の過程で見られる自我や日常の経験と重なる遊びの姿をくみ取っていく事が、子どもの「触りたい」「遊んでみたい」気持ちに繋がっていくと改めて感じた。

<事例2>「Tちゃんの成長の様子を追う」

自由遊びの時に自分が選んだ絵本を見る(2018年7月)→言葉を覚え、並行遊びから友達と関わる遊びができるようになった(2018年11月)→好きな遊びを楽しみ、家庭生活の様々な経験から自分なりに遊びを創る(2019年4月)→他児が遊んでいる所に近寄り、その遊びに参加。「いれて」の言葉はなくても、子ども同士の関わりをもつ。(2019年6月)

○保育者は子ども達の姿を見守るだけではなく、仲立ちとなり、状況に応じた関わり方や、言葉の使い方を知らせて気がつけるような関わり方が大切になると思われる。発想の豊かさ、経験の豊かさ、遊びの共感、共有が幼児期の遊びに繋がっていくと考える。

<まとめ>

「主体的」「対話的」で「深い学び」は、1・2歳児の子ども達のありのままの姿に繋がるものであり、保育者はこの年齢の子ども達とどのように関わったり環境を構成したりするとよいかを考える機会となった。一人ひとりの子どもが健やかに成長していくためには、保育者の関わりや環境作りが大切だが、3歳未満児クラスには複数の保育者がいるので、クラス内でも、クラスを超えての保育者同士の話し合い、連携が欠かせないので、伝達を大切にしていかななくてはならないと、改めて実感した。

## 話題提供 2 認定こども園こまくさ幼稚園

(研究・実践にあたって)

- 一人ひとりの思いや願いをじっくりと聞き、伝えあい、自らが意欲をもって遊ぶことができるような環境設定や言葉がけを大事に、子どもに委ね、任せ、先走らないような保育者の関り。
- 日々の振り返りや記録を丁寧にし、子ども一人ひとりの思いや意欲、遊びの方向を見極め、そこに保育者の願いやねらいをすり合わせ、長期的な保育の見通しに繋げていくよう努めている。

(年少組の事例)「魚遊びを通して」

- ・遊戯室でカラー積み木を魚に見立てトングを使って捕まえて遊んだ楽しさがきっかけとなり、その後釣ったり、魚を焼いたり、食べたりなどして魚釣りごっこを楽しむ姿となる。保育の振り返りをしながら遊びに必要な環境や援助について考えていく。年長児が魚釣りの様子を見て、紐やモールを使い、竿を作ってくれたり、家庭よりたこを作って持ってきて友達と遊んだり、たこを作ったりして遊びが広がる。他の遊びをしていた子も魚釣りに興味をもち、刺激を受け、繰り返し魚釣りの遊びを楽しむ。
- 一人ひとりが遊んでいる姿を見て焦らず遊びを支えていこうと思い、個々の遊びを大切にすることで「明日もやりたい」という言葉も聞かれ、存分に遊びを楽しんだことが伺われた。改めて一人ひとりの思いに寄り添い存分に遊びを支えていくことの大切さを実感した。

(年中組の事例)「大好きな虫を通して・・・～H君とともに～」

- ・H 男は、虫を捕まえたり、図鑑を見たりすることは好きだが、友達との関わりが少ない。H 男の好きなことを通して、友達と過ごす楽しさを感じてほしいと願う。保育者と一緒にオタマジャクシを捕まえ、クラスで観察をする中から、自分の知っていることを言葉にするようになる。更に友達や保育者から認められその経験が自信に繋がり、友達との会話や関わりが増え、虫以外の遊びにも興味をもてるようになった。ありのままの姿を受け止め関わる事ができた。
- 一人ひとりが自分の思いを伝えたり、相手の思いに耳を傾けたりする姿が多くなり、お互いに認め合う姿が見られるようになった。

(年長組の事例)「お泊り保育づくり」

- ・子ども達はお泊り保育にどんな思いをもっているのかクラスで話し合うことで友達の気持ちを知り、共感しながらも「楽しいものにしたい」と共通の意識をもった。ライト、月、星座などの飾りを友達と作ったことでお泊り保育への気持ちの変化が見られ「自分達のお泊り」と意識が高まった。
- 一人ひとりが考えたアイデアが認められ、自分達で考え工夫し、作っていく楽しさを存分に味わうことで楽しみにする姿が見られた。保育者は子ども達が様々な問題や疑問に直面した時に、答えを出すのではなく、思いを受け止め寄り添うことで子ども達自身が解決の糸口を見つけることに繋がった。

### ◎考察と課題

- ・子ども達と保育者の対話、子ども同士のやりとりの姿を丁寧に大切にしていこうと、願いや思いがより理解でき、それに対しての環境構成や見通しも見えてくるのではないかと。だが、保育者の環境の提供の仕方や保育者の何気ない一言でその後の遊びの内容や方向・広まりや深まりが大きく変わってくることも実感した。
- ・記録を取って振り返ってみると改めて一人ひとりに寄り添っていたか、育ちはどこにあったのかを客観的に見る事ができた。また、保育者間で保育の振り返りをする事で、評価の着眼点がお互いに高められていることを感じた。

## 質疑・応答

●話題提供を聞いた後、一人ひとりが疑問に思ったことや感想を付箋に書き模造紙に貼り出す。休憩時に質問の内容を司会者、話題提供園にてカテゴリ毎に分ける。(保育の内容・言葉がけ・記録の取り方・職員間の話し合い・異年齢交流などのカテゴリ) その後、質問について話題提供園からの意見を聞く。

・聖十字幼稚園(言葉がけについて) 0,1歳児にも赤ちゃん言葉は使わない。日々の生活の中で使っている言葉「お腹がすいたね」などの声かけをしたり、見守ったりしながら信頼関係を築いている。

・こまくさ幼稚園(職員間の話し合いについて) クラスの事、園全体の事、研修の事、保育の振り返りを、曜日を決めて徹底的に話し合う。

## グループ討議(1グループ5~6名 18グループに分かれる)

●話題提供の内容から、2つの協議の柱をあげ、自分の考え(青色付箋…提案、課題 黄色付箋…いいね)をできるだけ多く付箋に書き出し自分の意見を言いながら模造紙に貼っていく。

協議の柱

①「子どもに寄り添い、応答し、それによって子どもが人としての心地良さを味わい健やかでのびのびと育つ環境とは」(聖十字幼稚園)

②「保育者の子どもの評価、振り返りと支援について」(こまくさ幼稚園)

●話し合い後、18グループから5グループをくじで選び、各グループ2分で話し合いの内容を発表してもらう。(5グループのうち2グループ抜粋)

### 【Oグループ】

①いいね・保育者との関わりで体験したことを話せる信頼関係がある。素材の出し方は扱いやすい物、イメージしやすい物。日常生活で経験した遊びをしている。

提案 ・遊びが広がったら広いスペースを確保する。スポンジという素材を教材研究して出すと遊びが広がるのではないか。

②いいね・子どもの興味・関心・思いに寄り添い、保育者同士情報共有し、連携をとることで主体性に繋がる。

課題 ・他年次の保育者との話し合いも密にし、より良い保育となるように共通理解をする。

### 【Kグループ】

①いいね・子どもが興味をもって遊んでいるところを充分深めている。手作りおもちゃが多く、素材の特性、感触を味わうことができ温かみがある。

提案 ・素材の提示の仕方、牛乳パックを短くしたり、切り開いたりしても面白いのではないか。

②いいね・子どもが主体的となって遊びを進めるのが上手、日頃からいろいろ関わらないと発言したり、遊びを深めたりすることができない。

課題 ・意見が言えない子に保育者からのヒントがあってもいいのではと思った。

## 助言者まとめ

### ○聖十字幼稚園

#### ①「主体的に学ぶ」保育とは…個々の発達段階と遊びの姿

乳幼児期の発達を踏まえた体験・遊びを大事に、子ども達が手に取るもの、持ってきたもの、関心を示したものなどを見逃さずに位置づけようとしていた。このことが、「健やかにのびのびと育つ」「身近な人と(特に保育者)気持ちを通じ合う」「身近なものに関わり感性が育つ」ことに繋がったのではないか。

#### ②幼児の歩みを支える保育とは…乳児からの発達と学びの連続性

一人ひとりの子どもの安定感や安心感、自分を肯定する気持ちを保育者は育もうとしてきた。そのために保育者は、受容・共感することを大事にした。否定はしない。子ども達との信頼関係を高めることで、一人ひとりの発達過程の把握につなげ、子ども達の自発性や探求意欲を育てる源になるのではと考えた。

### ○こまくさ幼稚園

#### ①子どもが主人公の活動とは…自発活動と学びの連続性の重視

活動の主人公が子どもであることに重点を置き、遊びが「学び」ということ、子どもが「真ん中」であることを原点としている。子どもがどのように遊びの構築をするのか、それは保育者を見ながら学んでいる。子どもが自分で見つけ、それにのり出すように追求していくことで生きる素材の教材化となる。それを記録し、職員組織+保育者個々の力で子どもを支援していくのである。そして、子ども達の活動が膨らんでいく事に繋がるのである。

#### ②子どもが見えるということ…「振り返り」による子ども理解と支援、評価

振り返りによって子ども理解が連続していく。そしてそのための支援と評価が一体化する。また、夢中になって遊びを展開する子ども達の育ちを分析し記録する。これが指導改善に繋がる評価である。保育者一人の記録だけではなく、職員間で常に共有し、学び合いになり、情報の共有になるのである。

### ○「主体的・対話的で深い学び」の実現のために「遊びこむ⇔学び続ける過程」

- ・自分で考え創り出す嬉しさ、喜びの実感 ・発見したり見つけたりする楽しさの体験
- ・工夫したり広げたりして活動を高めていく満足感
- ・友達や先生と活動の歩みを共有できる嬉しさ、自己肯定感
- ・基本的な生活習慣の育成、生活リズムの定着化、コミュニケーションする喜び
- ・友達や先生との繋がりで見られる感性

チームの一員として、自園の教育理念を共有し、高め合う職員集団、園内研修を位置づけ自己を高めたいと、日々研鑽に励む姿に出会った。園児に寄り添い、願いを共有し、受容していく地道な取り組みを通して「遊び」の意味を見出し、子ども達が作り上げていく活動そのものに「学び」を感じ、支援を惜しまない姿であった。参画意識を高く持ち、幼児教育保育のプロとして主体的に協議し合う多くの先生方に出会った。子ども達の「生きる力」の育成に向けて「主体的・対話的で深い学び」の具現化をさらに進めていく必要がある。